

## 学会創立の前後

大阪教育大学名誉教授

伊 東 祐 一

### Before and After the Foundation of the Balneological Society of Japan

Yuichi ITOH

Professor Emeritus of Osaka University of Education

皆様も御存知のように、我が国は温泉国日本と言われておりまして、非常に多くの温泉場が存在します。ここで人はよく温泉の数が多いと言いますが、正確には温泉場(おんせんじょう、おんせんば)の数のことで、温泉が多いというのはおかしいことです。昭和63年3月の環境庁自然保護局施設整備課の調査によりますと、2,189という温泉場が数えられております。国土面積の単位面積当りの温泉場の数は、正確な統計がございませんが、恐らく世界に冠たるものがあると思います。しかも現在でも地方自治体とか、或はその地域の要望によって、その土地の振興策の目玉として温泉を盛んに掘削しております。従って年々新しい温泉場が生れて、温泉場の数は多くなっております。しかし本当の温泉、本当のと言うとちょっと語弊があるかも知れませんが、昔からこんこんと自然に湧出している温泉場の数、殆ど人手が加えられていないものは、600~700個所ぐらいかと思います。これも数えてはおりませんので、正確な数ははっきり分かりません。環境庁の統計ではこれらの区別はしておりませんから、全く分らないと言ってもよいと思います。

古くから温泉は人の注目をあびておりましたが、温泉を利用する、殊に医学的利用、治療に利用するようになったのは、記録では江戸時代中期以降のことで、最初の人は後藤良山とその門人によってであります。また温泉に関する初めての著作は柘植龍州によって行われ、そして非常に素朴な方法ではありますが、温泉の分析というものを始めたのは宇田川榕菴でございます。明治になりますと、御承知の通り泰西の文物、技術、科学というようなものが入って来ましたので、温泉の研究も段々進んで参りました。主に分析とその利用、つまり医学的用法に関する著書も段々見られるようになりました。そこへ有名なキュリー夫人によりラジウム、ラドンが発見され、これが万病の薬のように言われたらうえ、ごく微量が温泉に入っているということで、温泉が万病に効くように考えられるようになって参りました。従って温泉分析も盛んに行われるようになって来まして、我が国でも国立衛生試験所の石津利作氏が国内の主な温泉を集めて分析し、その医療関係及び関連事項をまとめて一書をなしております。丁度その頃パナマで開催されていた太平洋国際博覧会にこの本を登場させまして初めて日本の温泉が世界に紹介されたような次第です。昭和年代に入りますと、温泉の研究もますます盛んになって参りまして、昭和4年には内務省と鉄道省、つまり鉄道が温泉地に行くための輸送機関の役割として鉄道省、現在のJRの肝煎りで出

来るだけ多くの温泉に関する資料を集め、初めて温泉展覧会が上野の科学博物館で開かれました。また同じ年、やはり内務、鉄道両省の肝煎りで学識経験者や業界有力者等が加わって「社団法人日本温泉協会」が設立されました。その活動は温泉の啓蒙、発展、指導、その他いろいろなことに寄与し、更に雑誌「温泉」を毎月発刊して現在に及んでおります。そういうわけでこの昭和4年という年は温泉にとりましては、温泉展覧会があり、また初めての温泉の会である温泉協会が生まれた年であります。次に昭和9年、温泉を科学的に研究する「日本温泉気候学会」が設立されました。これが日本における温泉関係の学会の最初であります。また昭和6年、九州大学は別府市に温泉治療学研究所を開設し、引続いて同10年には北海道大学が登別温泉、12年には鹿児島大学が霧島温泉、14年には岡山大学が三朝温泉、そして19年には東北大学が鳴子温泉というように各大学も温泉に関する研究機関や温泉病院を次々開設致しました。しかし折角盛んになりかけた温泉研究ではあります、御承知のように昭和の初め頃には、日本の一般の情勢がおかしくなっていて、温泉の研究も芽が吹出したところで切られてしまうというような状況になって参りました。温泉研究はそれ以前、大正の終りから昭和の初め頃にかけては、非常に広く科学の全分野にわたって、例えば温泉分析は分析化学者や薬学者、温泉の物理は地球物理学者、そして地質は地質学者、温泉に生息している生物の研究は生物学者というように、各部門ごとに熱心な人によって行われておりました。温泉旅館の建築、殊に浴室の構造が普通の浴室と違うので、それに対する研究が建築学者の間でも行われました。これらの間には何の連携もなければそれを発表する場もなく温泉場が増えるにしたがい、いろいろと問題がおこり温泉に関する法律も生まれて参りました。温泉に対する多義多端の分野、学術について統一したものが欲しいという声は大正の終り頃から昭和の初め頃にしばしばありましたが、それを自分がやろうと言い出す者もありませんでした。「言い出しっぺ」は自分で最初にお膳立てをしなければならないからです。はからずも、昭和14年ですか、同好者10数人が本郷の三楽荘に集まっていると温泉に関する論議を交わしましたが結局結論に達せずやろうという人は誰もおりませんでした。その時後まで残った、時の東京高等師範学校教授の岡田弥一郎氏、同門の上村三男氏と私、それから他に1、2の方も加わって、この際温泉に関する学会なり、会誌を発行しなければとても今の社会情勢としては不可能になるばかりであるから早速やろうではないかということになりました。ここに「温泉科学会」—その時はそういう名前ではありませんでしたが—をつくり、「温泉科学」という雑誌を発行しようという話がまとまりました。話がまとまれば一刻も早くしなければいけないということで、早速5月にその会を開いたのですが、1か月もたたぬ6月には具体的に発起人会、世話人会といったものを作りまして、いろいろ温泉に関心を持っている方々、慶応大学の藤浪剛一氏、東京大学の木村健二郎氏、岡田弥一郎氏、学習院の江本義数氏、東京文理科大学の吉村信吉氏と私の6人で準備会を結成しようということになりました。早速藤浪氏の肝煎りで、時の霞ヶ関の華族会館においてその準備会を始めました。その時は世間に遠慮したと言いますか、あまり大きなもの、大袈裟なものせず、「温泉研究談話会」をつくり、月に1回位温泉に関する話をして、それによって温泉を啓蒙し、会員を獲得して「温泉学会」をつくり、更に雑誌を発行する前提にしようという話が決まりました。今申し上げた世話人が幹事となり、その後柴田雄次、三沢敬義、宮部直己、菅原 健、津屋弘達、平山 嵩、朝比奈貞一、黒田和夫、南 英一、野口喜三雄、小穴進也の11氏も加わって会を運営することに致しました。しかしそれは非常に多難な道でありました。第一資金的に無一文の集りであること、その前年には国家総動員法が出来、更に引続き物資制限令が行われ必要な紙が自由にならなくなった上、結社、出版、集会も許可制になるなどだんだん窮迫して参りました。ともかく、当時東京帝国大学名誉教授の中村清二氏を会長に迎えて、10月7日に東京上野の科学博物館において、第1回研究談話会を創立記念講演会として開くことになりま

した。中村会長の開会の辞、藤浪剛一氏の「日本温泉治療学の発達史」、岡田弥一郎氏の「日本の温泉動物について」の2講演と、それに加えて映画「健康は温泉から」と「聖地高千穂」を2巻上映致しました。当時の会員数は138名でしたが、それに対して84人という多数の参加者があり、第1回の試みとしては、非常な盛況でした。それから、殆ど月に1回ずつ、第7回までこのような会合が続きましたが、こういう状態では不安定で、もっとしっかりとした組織、即ち「温泉科学会」として確立しなければならない、ということになりまして、昭和16年に学会に改組して、学会誌を「温泉科学」と命名致しました。但しこの時の学会の名称は「日本温泉科学学会」で、現在の「日本温泉学会」になったのは後のことです。

この談話会の講演は、「温泉研究談話会誌」に掲載し、第1号から第7号まで続けまして「温泉科学」に発展的に解消したのであります。ところが、事態は急を告げてきて新規発刊物は一切禁止というような声も伝わって参りました。そこで大いに慌ててこの年の5月19日に私が内務省の警保局検閲課に再三足を運んで何とかして学会誌の発行の許可をとお願いし、純粋な学術誌だということを言いふくめるようにして、やっと了解を得て許可になりました。ところが、今度は紙の問題が出てきました。紙に関しては私は全く無知で、1巻を綴るのにどれだけの紙が要るのか、紙の単位はどういうふうにして数えるのか、何にも知りませんでした。大抵の印刷物は、それまでは印刷所、出版所ですべて引受けていましたが、その頃はだんだん事業を縮小したり、あるいは廃業したりするようなどころが出ている時代ですから、学会誌のように面倒なものを新しく引受けてくれるところはなかなかなく、やっと藤浪氏の懇意の成文館という書館が引受けてくれましたが、これもだんだん先細りになってしまいました。参考までにその時の会計状態を申し上げますと、1部1円、年会費2円、今ではちょっと想像出来ません。それに対して、広告料だけで何とかやろうと、広告料は1ページについて30円としましたが、広告を出してくれる人は誰もおりませんでした。そういう点においても非常に困窮したのであります。その時の申込み用紙の文章が面白い文章でありますから、参考までに申し上げておきますと、「申込用紙ノ件」と書きまして、「オ申込ノ節ハ郵便振替貯金用紙郵送可仕候間御送金下被度候」という文章でございます。その頃は郵便振替貯金ということでありまして、極く僅かですが利子がついたのであります。またその数字を書くののに、一、二、三というのではいけない、ちゃんと正確に壱、弐、参を用いよという注意書きまであって、今では考えられないようなことです。そういう状態で、紙の方は出版文化協会というところに申し入れて、配給を受けることになるのですが、役所がなかなか認可をしなかったように、民間団体でもどうしても紙をなるべく少なく出そうとする、こっちはなるべく沢山取ろうとする、沢山取ろうと申しまして先程申しましたように、紙の数量が分からない、おまえはそれでは何ぼ要るのかと言われても、紙をどうやって計るのか、どの位要るのか見当もつかず大変困りました。そここのところは何とか切り抜け、用紙も確保出来ました。そして当局の理解も得、許可されたので、おおっぴらに発行出来るようになりました。その後、当時の中村会長が多量の紙を保管していてそれを放出して下さいましたので大いに助かりました。また、資金の面においても藤浪剛一氏が今村資金をお持ちになっていましたので、その資金の利子をすべて学会の方に寄贈するという申し出もあり、やっと物心両面で一息ついたものでした。

「温泉科学」もどうやら発行することが出来ましたが、発行部数が少ない上、戦災ですべて焼失してしまった方も多く、バックナンバーは殆ど残っておりません。

ここに「温泉科学」という雑誌、機関誌ができ、学会をして研究発表する、そしてその結果を学会誌に載せるという現在のいわゆる学会の形態というものが一応整ったのですが、社会情勢もいよいよ悪化して参りまして、戦前は年次大会を遂に催すことが出来ませんでした。丁度偶然この16年という年は、御承知のように太平洋戦争に入った年でありますから、世情が非常に険悪で

我々が活動するには、なかなか困難なことでしたが、会員になる方は非常に多く、その時の調査によりますと、会員数は399人に増加しております。

とうとう学会誌の方も、18年9月に発行した第3巻第3号をもって遂に発行停止、休刊ということになってしまいました。しかし会そのものを消滅させることは出来ませんから、会だけは何とか維持しようと、事務的なことだけを残したほかは、講演会の開催も、学会誌の発行も不可能な状態に陥ってしまいました。

御承知のように昭和20年、1945年に大戦も終りを告げたのでありますが、世間は全く混沌として、国民は虚脱状態に陥り、脳の中は空っぽで学会どころの騒ぎではない、毎日の食べるものにも苦勞するというような世の中でございました。これは経験のない方には分かりませんが、経験した方はしみじみ感ずることと存じます。私などもそれは身にしみて感じております。もうそんなことで昭和20年はお話になりませんが、21年になりますと何とかして活動をはじめようではないか、という非常に熱心な会員の方も現れてきました。しかし戦争中に亡くなった方もあり、また住所不明で連絡のとれない方も多く、会員数は数字の上では非常に増えているのですが、実際はその半数にも達しませんでした。

昭和22年に温泉協会が温泉講演会を上野駅で開きました。私も頼まれて温泉の話をしたのですが、その時温泉協会の副会長で、城崎温泉組合の会長をしていた西村佐兵衛氏が、自分のところで一切引き受けるから、心配しないで大会を開催せよということになりました。これはいわゆる棚ぼた式の話で、その御好意により翌23年5月1、2日の両日に開催させて頂くことに決めました。あとは西村氏がすべて物心両面において努力をして下さいまして、そのお蔭で翌年5月1日、2日、その年は桜の咲くのが遅れ、丁度桜は満開、時よし、場所よしながら乗車券の入手も困難な不自由な時代であり、また食糧も皆無といった状態で、米袋をぶら下げて行かねば旅館に泊まっても飯を食べさせてもらえないというような、今から想像もつかないような時でしたが、南は鹿児島から北は北海道に至るまで、非常に熱心な方々74名が集まりました。その上、町内の多くの人が参加されまして、狭い町の公会堂は超満員の盛況を博し、初めての試みとしては非常に成果を上げたことでございました。その時の内容は、研究発表が27題に及び、特別講演として北海道大学の太秦教授が「温泉の変化について」という題で話されました。城崎温泉は、外湯が非常に発達しており、2日目は町当局のご好意によって泉源地帯から浴室の状態まで一つ一つ視察させて頂きました。その頃の会員数は463名と記録してありますがこれは実員の倍位になっていたのではないかと思います。時間もなくなりましたから、それでは参考までに2回以降の開催地を申し上げておきますと、第2回長野県野沢温泉、第3回和歌山県勝浦温泉、第4回静岡県嵯峨沢温泉、第5回大分県由布院温泉、第6回福島県飯坂温泉、第7回岩手県花巻温泉、第8回鹿児島市、第9回新潟県松之山温泉、第10回道後温泉、第11回山形県上ノ山温泉、第12回上諏訪温泉、第13回湯来温泉、広島県でございます。そして14回が草津温泉でございまして、この時「日本温泉科学学会」といって「学学」と続くのを、現在の「日本温泉科学会」という名称に改めました。

第二次世界大戦という難事を切り抜け、本会は非常に熱心な会員の皆様方のご協力によりまして、戦後もますます盛んになりました。しかし、温泉の科学というのは、まだまだ発展途上にございまして、解明しなくてはならない問題が多々あります。これから21世紀に向けて少荘有為の方々に格段の御努力を願って、それぞれの専門の分野において一層の御奮闘をお願いしてお話を終りにさせていただきます。